

世界の巨大企業アップルを動かした 日本人発明家 齋藤憲彦氏の軌跡

(一社)発明学会 平井 工



アップルが誇る大ヒット商品「iPod」。そのコア技術に、ある日本人発明家のアイデアが使われているのをご存じだろうか。iPodの顔ともいえる特徴的なリング形状の入力デバイスの仕組みは日本の発明家齋藤憲彦氏のアイデアなのである。

2007年3月、齋藤氏はこのiPodに自身の特許技術が無断で使われたとして世界的企業であるアップル（日本法人アップルジャパン）を相手取り裁判に挑む。そして2013年9月、最初の特許出願から実に16年目にようやく勝訴を得た。その経緯は2019年4月に放送されたNHKの番組「逆転人生」にも取り上げられ、一躍時の人にもなった。

現在、富士山の裾野にある河口湖畔のマンションに住み、研究に明け暮れている齋藤さんを訪ね、自身の発明した入力デバイスのアイデア発想から勝訴に至る経緯を聞いた。



巨象に立ち向かった ある日本人発明家

2013年9月26日の東京地裁で一つの判決が下された。その判決内容は「アップルジャパンは齋

藤憲彦氏に損害賠償金3億3364万1920円を支払え」というもの。

名刺ほどの小さな携帯音楽プレイヤーに1000曲以上がメモリーされた「iPod」は、2001年にアップルから商品化された世界的なヒット商品だ。

操作盤のリング形状を指でなでながら画面上に曲名をスクロールさせ、プッシュして選曲、再生をスタートする。この簡単な操作を「クリックホイール」といい、ヤング層から中高年にまでまたたく間に愛用者が広がった（写真1）。

齋藤憲彦氏は、このクリックホイールの技術に「自分の特許が無断で使用されている」とアップルの日本法人アップルジャパンを相手に争った。冒頭の判決文はその特許裁判により下された勝訴判決である。判決は知的財産高等裁判所を経て、2015年9月9日に最高裁判所で確定。齋藤さんは遅延金を含めて4億円の賠償金を手に入れた。



極貧のなかで勝ち取った 特許勝訴判決

道のりは長かった。齋藤氏は発明の特許権取得

◆ Profile ◆



(株)齋藤創造研究所

齋藤憲彦（さいとう のりひこ）氏

代表取締役社長 発明家

(株)富士通ピー・エス・シーでBIOSやOSの開発に従事。退職し友人とともにシステム制御請負開発会社を創業。紆余曲折を経て発明した入力装置をめぐり、アップルとの訴訟を経験。現在は自身の会社「株式会社齋藤創造研究所」CEOとなり、発明家として新たな入力装置の開発に取り組む。